

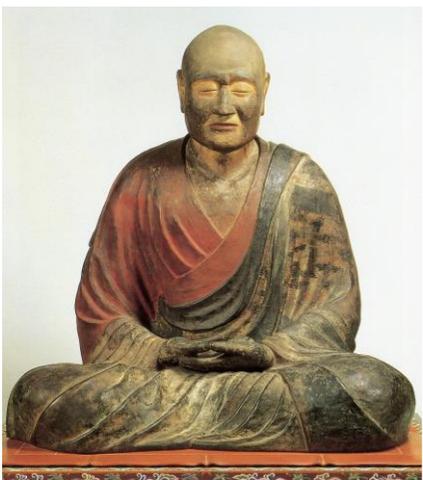
【究極の肖像とは何か？―仏教におけるミイラづくりを知る―】

【肖像と肉身像、加漆肉身像、遺灰像】

本来、肖像というものは、モデルに似せることを目的とした芸術であり、それは洋の東西、時の古今を問わない。そして、モデル本人により近く似せるということを突き詰めれば、本人そのものであるということになるであろう。

その意味で、肉身像、すなわちミイラこそは本人そのものであり、「本人の死後も残る本人」として、これより理想的な肖像はない。紀元前よりミイラづくりに長け、そのうえ土葬を重んじてきた中国では、仏教伝来以降も土葬を背景とした肉身像の制作を続けてきた。さらに、唐代8世紀には、補強と装飾を目的として、像の表面に漆を加えた加漆肉身像に発展した。その一方で、西方由来の火葬を背景とした遺灰像の制作も、遅くとも8世紀中頃には始まっている。

中国にはその時代までさかのぼる像はほぼ現存していないが、奈良・唐招提寺の鑑真像こそ、そうした状況をうかがわせる格好の資料に他ならない。日本の肖像彫刻の白眉とされるこの像は、鑑真その人も、造像を思い立った弟子たちも、おそらくは制作した仏師たちも中国人であり、中国唐の代表的肖像彫刻とみるべきものであることに注意する必要がある。



(脱活乾漆造) 鑑真和上坐像
天平宝字7年(763) 高さ81.8cm
奈良・唐招提寺



※鑑真その人の生き写しと言わざるを得ない徹底した写実。閉じた目は左右の大きさが違う大目小目、口ヒゲと顎ヒゲ、後頭部のやや長めの髪にまじる白髪、さらには少しよじれた耳の毛まで克明に描きこんでいる。

※中国における肉身像のはじまり

【史料1】

『高僧伝』卷九「単道開」伝(梁・六世前半 慧皎撰)

「晋の昇平三年(三五九)に至り、春秋百余歳にして山舎において卒す。弟子に勅して屍をもつて石穴の中に置かしむ。…晋の興寧元年(三六三)、陳郡の袁宏、南海太守と為る。弟の穎叔および沙門支法防とともに羅浮山に登る。石室の口に至り、開くに形骸および香火瓦器なお存するを見る。宏いわく、法師の業行殊群なり。正にまさに蟬蛻(せんぜい)のごとくなるべきのみ」と。

※蟬蛻…道教において仙人になる方法のひとつ。セミが抜け殻を残して飛び去るように仙人になること。このような仙人を、「戸解仙(しかいせん)」という。

【史料2】

『宋高僧伝』巻二「善無畏」伝（北宋・九八八年 贊寧撰）

「開元二十三年（七三五）：右脇して足を累（かさ）ね、奄然として化す。享齡九十九：定慧（じょうえ）薫ずるところ、全身不壞なり。」

※定慧：戒律、禪定、智慧のこと。

※加漆肉身像への発展

【史料3】

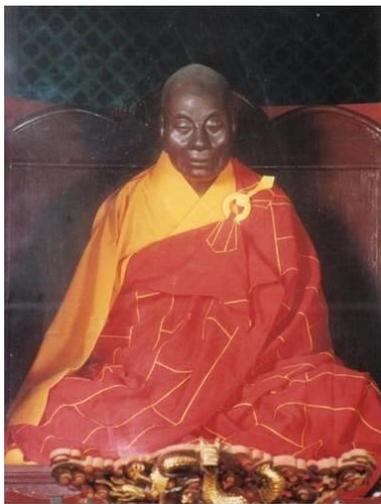
『宋高僧伝』巻十八「後僧会」伝（北宋・九八八年 贊寧撰）

「躡歩（しほ）の間、立って息絶ゆ。：手を挙げ迎揖（げいゆう）することく、足跨（そくか）して行かん^と欲するに似たり。：ほほ傾移せず、色身堅牢といえども、而も彊（つよ）むるに膠漆をもちいたり。」

【史料4】

『宋高僧伝』巻八「慧能」伝（北宋・九八八年 贊寧撰）

「先天二年（七一三）八月三日、俄然として示疾せり。異香室に満ちたり。：又、能の端形は以て散らずして入禪定の如し。後、漆布を加えたり。」



（加漆肉身造？）慧能像
唐・先天2年（713）頃？
広東省韶関市・南華寺

【史料5】

『宋高僧伝』巻二十五「遂端」伝（北宋・九八八年 贊寧撰）

「咸通二年（八六一）、たちまち結跏趺坐して而して化す。：二十余年して墳塋しはしは光を發す。のち開きてこれを見るに、形質生きているがごとし。衆、迎えて寺に還り、漆紵をもってこれを飾る。今、真身院と号し存す。」

【史料6】

『宋高僧伝』巻二十二「王羅漢」伝（北宋・九八八年 贊寧撰）

「開宝初年（九六八）におよび、六月の内にたちまち座して終えたり。三日して後、之に漆布す。たちまち両頬の間に唎声を鳴らす聞き、皆、潰爛すという。」

- ・小杉一雄 「肉身像及遺灰像の研究」『東洋学報』第二十四卷、一九三七年
- ・安藤更生 『鑿真大和上伝之研究』平凡社、一九六〇年
- ・小杉一雄 『中国仏教美術史の研究』新樹社、一九八〇年（特に第三部「肖像研究」）
- ・小杉一雄 「鑑真和上の弟子たちは和上をミイラにしたかったのだ」『奈良美術の系譜』平凡社、一九九三年
- ・松本昭 『増補 日本のミイラ伝』臨川書店、二〇〇二年
- ・多川俊映、今津節生ほか 『阿修羅像のひみつ』朝日新聞出版、二〇一八年
- ・国立科学博物館編 『ミイラー 永遠の命を求めて』展覧会図録、二〇一九年

【参考文献】

「宝字七年（七六三）、癸卯の春、弟子の僧忍基、夢に講堂の棟梁摧折するを見る。寤（さ）めて而して驚き懼れ、大和上の遷化の相を欲すなり。すなわち諸弟子を率い、大和上の影を模す。是の歳の五月六日、結跏趺坐して西に面して化す。春秋七十六。化して後三日するも頂上なお煖（あたたか）し。是によりて久しく殯殮（ひんれん）せず。闍維に至りて香氣山に満つ。平生かつて僧思託に謂いて言う。我もし終えれば願わくば坐死せん。汝、我がために、戒壇院において別に影堂を立つべし」と。

【史料8】

『東征伝』（七七九年 淡海三船撰）

※鑑真像制作の経緯

「至徳元年（七五六）：無疾により示滅す。…その相にもとづく舍利分塑の真形、爾るの日、面みな汗を流す。」

【史料7】

『宋高僧伝』卷十九「無相」伝（北宋・九八八年 替寧撰）

※火葬を背景とした遺灰像



（脱活乾漆造）如来坐像
唐・8世紀頃
高さ 96.5 cm
メトロポリタン美術館蔵



（脱活乾漆造）如来坐像
隋6世紀末～唐7世紀初
高さ 99.5 cm
フリーア美術館蔵

